



7
8
9
450
1
2
3
4
5
6
7
8
9
450
1
2
3
4
5
6
7
8
9
4

6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7



蘇東坡詩

義烈百首序

蘇東坡詩



義烈百首序

哥言其志故使誦者與其善心
畫與其杖故使觀者想其風采
然而哥者詞意婉曲非幼子少
婦之所能解畫則披覽了然凡
有目者皆可以弁賞賤淑慝之
分矣是以合二者而後可以得
全勳善之道川柳翁所著義烈



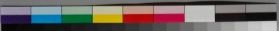
百首写其肖像又係以其哥可
謂勸善之道備焉於戲翁之愛
世也其亦厚矣刻成請序於余
余嘉其志贅數言於其端而
之

嘉永二の酉冬

尾陽 文嶺原田記撰

繪本尾陽記七書

百人といわれ小倉山の村もなりぬ昔より世ふつて
そりて老翁に敬んでを好たりまことに此は松の
本なりくふまかふと母のむねをいふは此の
様なり。諸尾の徳のふつてをいふは、
我酒をいふは、酒のふつてをいふは、
みよ大に、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
杯のこぼさぬ、拾も、福を、山、花、若、り、昔、の、言、乃
賜、年、を、え、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、



山女良將英士の傳を携へて撫致すにをたき
またを野原の雪は先きの流すまゝに
まゝよき名よし 列女の心をなほはてすを流
北にまゝ多きをゆゑのせに流すをまゝに流す
なく義烈百首とて書家の意をもまゝに流す
拙を能く流すは流すは流すは流すは流すは流す
あまはまゝに流すは流すは流すは流すは流すは流す

大正二年

播磨川柳

義膽貞肝忍苦卒令
名竒績照穹昊請看
端力窮精効豈盡
資聖哲也

尾陽

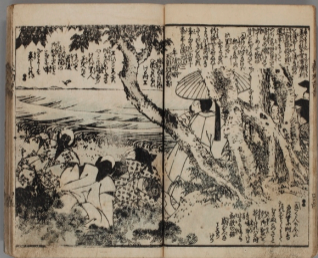
文嶺道













源実朝公
石之代也
あきも
佐平下

三十三

下、左、右
かきかき
かきかき
かきかき
かきかき
かきかき

三十三
下、左、右
かきかき
かきかき
かきかき
かきかき
かきかき



源実朝公
石之代也
あきも
佐平下

紀伊守の御覧
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、



Vertical text columns on the upper right page, likely a preface or commentary.

Vertical text columns on the upper left page, likely a preface or commentary.



阿野倉成 玉ねり地廻
 の芳ら
 風ふ
 まつ
 秋枝
 乃ほも



北條綱時
白梅の物語
元寇にゆせり
あはれ
七
たつねの星
宿をまよふ



北條綱時
白梅の物語
元寇にゆせり
あはれ
七
たつねの星
宿をまよふ



[Faded vertical text in the top section of both pages, likely a preface or introductory notes.]



松崎局
あぢきあぢき

あぢきあぢき
の目よ

をま^りる
拜^せる

の^りの^りに^て

給^ふる^ん



佐渡君
佐渡君

佐渡君

の^りの^り

の^りの^り

の^りの^り

の^りの^り

の^りの^り

空^の月
あ^の月

[Small vertical text on the left edge of the page, possibly a page number or reference.]

Handwritten text in vertical columns, likely a preface or introductory text, spanning across the top of both pages.



此の巻は、
 虎と狼の
 争ひの事
 を記す。



上野千太郎朝村
 申多し
 神多し
 夏を冬にあり
 業條政村
 申多し
 神多し
 夏を冬にあり



長尾景春の物語
 長尾景春は、武田の重臣で、武田信玄の側近にあり、武田家の興隆に力を尽くした。武田信玄が、武田家臣の争いを平定し、武田家を統一した。景春は、武田信玄の命を受けて、武田家の領土を守り、武田家の名譽を高めた。武田信玄が、武田家の領土を拡張し、武田家を盛衰させた。景春は、武田信玄の命を受けて、武田家の領土を守り、武田家の名譽を高めた。武田信玄が、武田家の領土を拡張し、武田家を盛衰させた。景春は、武田信玄の命を受けて、武田家の領土を守り、武田家の名譽を高めた。

小串範秀の物語
 小串範秀は、武田家の重臣で、武田信玄の側近にあり、武田家の興隆に力を尽くした。武田信玄が、武田家臣の争いを平定し、武田家を統一した。範秀は、武田信玄の命を受けて、武田家の領土を守り、武田家の名譽を高めた。武田信玄が、武田家の領土を拡張し、武田家を盛衰させた。範秀は、武田信玄の命を受けて、武田家の領土を守り、武田家の名譽を高めた。



持世は天竺三藏の弟子にして、
唐土に於て佛法を弘め、
唐土に於て佛法を弘め、
唐土に於て佛法を弘め、
唐土に於て佛法を弘め、
唐土に於て佛法を弘め、
唐土に於て佛法を弘め、
唐土に於て佛法を弘め、

持世は天竺三藏の弟子にして、
唐土に於て佛法を弘め、
唐土に於て佛法を弘め、
唐土に於て佛法を弘め、
唐土に於て佛法を弘め、
唐土に於て佛法を弘め、
唐土に於て佛法を弘め、
唐土に於て佛法を弘め、

宋尊親王



公依大平



梅正行の母
 世乃春と
 信らるる
 夫のん
 いと
 忠
 道に
 梅と那らるる
 北留瀬がま
 花むま
 る不
 石
 面
 う美世の
 とのま
 わらん



此の巻は、
 大徳寺の
 縁起に
 依りて
 作られたる
 事なり。
 其の
 事蹟は、
 昔に
 大徳寺
 の僧徒
 が、
 山に
 入りて
 修行
 せしが、
 一日、
 山に
 大蛇
 ありし
 事あり
 と云ふ
 事あり
 云々



此の巻は、
 大徳寺の
 縁起に
 依りて
 作られたる
 事なり。
 其の
 事蹟は、
 昔に
 大徳寺
 の僧徒
 が、
 山に
 入りて
 修行
 せしが、
 一日、
 山に
 大蛇
 ありし
 事あり
 と云ふ
 事あり
 云々



Handwritten text in vertical columns at the top of both pages, likely serving as a preface or commentary for the illustrations below.



Various columns of vertical text, likely commentary or a preface, written in small characters. The text is arranged in approximately 15 columns per page, filling the upper half of the book's pages. Some characters are larger and more prominent than others, possibly serving as section markers.



義嗣公の御事
 大正十一年
 秋風を懐く
 霜倍々
 秋の香
 虫の音
 秋風を懐く



大正十一年
 秋風を懐く
 霜倍々
 秋の香
 虫の音
 秋風を懐く

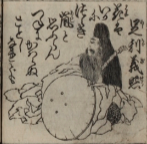


Vertical text in the upper left quadrant, likely a preface or introductory text.

Vertical text in the upper right quadrant, likely a preface or introductory text.



Handwritten text in two columns, likely a transcription of a story or a list of items. The text is written in a cursive style (sōsho) and is densely packed. The right column contains more text than the left column.



Vertical text on the left edge of the page, possibly a page number or a reference.

Small vertical text at the bottom of the page, possibly a signature or a date.



此の巻は、昔の事蹟を記し、
 諸君の御覧に申上り候。此の
 巻は、昔の事蹟を記し、諸君の
 御覧に申上り候。此の巻は、昔
 の事蹟を記し、諸君の御覧に申
 上り候。此の巻は、昔の事蹟を
 記し、諸君の御覧に申上り候。



此の巻は、
 昔の物語を
 今の人に
 知らせる
 ための
 書物である
 こと、
 諸君は
 心に
 留めて
 置か
 せう。



神無月... 思ひ... 舟... 同... 仕... 女...



Small vertical columns of Japanese text, likely commentary or a preface, located at the top of both pages.





Small vertical columns of text at the top of both pages, likely serving as a preface or introductory text for the illustrations below.



此の物語は、
 昔の事なれど、
 世に傳へられし
 事なり。其の
 事は、
 昔の事なれど、
 世に傳へられし
 事なり。其の
 事は、
 昔の事なれど、
 世に傳へられし
 事なり。其の
 事は、

此の物語は、
 昔の事なれど、
 世に傳へられし
 事なり。其の
 事は、
 昔の事なれど、
 世に傳へられし
 事なり。其の
 事は、
 昔の事なれど、
 世に傳へられし
 事なり。其の
 事は、



この物語のなかから
この物語のなかから
この物語のなかから
この物語のなかから

この物語のなかから
この物語のなかから
この物語のなかから
この物語のなかから



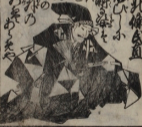
Handwritten text in vertical columns, likely a preface or commentary. The text is dense and covers most of the upper half of both pages.





諸君、此の巻は、
 天竺の僧侶、
 西遊記の事、
 法師の修行、
 及び、
 西天の事、
 などを、
 述べ、
 世に、
 教を、
 説く、
 事、
 を、
 記す。

北條 貞直
 結ひ小
 解る給を
 氷に色衣
 舟の
 おの
 ろも、
 せや



此の巻は、
 法師の修行、
 及び、
 西天の事、
 を、
 記す。

秋の道
 山はも
 かき
 り
 る
 空の
 春の
 暮れ



上段の欄には、縦書きの漢字とかなで書かれた説話や伝説の本文が記されている。右側の欄には、左側の欄と対応する形で、より詳細な説明や補綴が記されている。

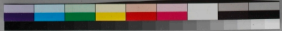


大田三樂齋
 此の巻は、
 大田三樂齋の
 筆で書かれた
 物語の巻である。
 内容は、
 大田三樂齋の
 生涯や、
 彼の著作について
 述べられている。
 巻の初めに、
 大田三樂齋の
 自伝が記されている。
 大田三樂齋は、
 江戸時代中期の
 著名な書生で、
 多くの著作を
 著した。
 この巻は、
 大田三樂齋の
 生涯を、
 簡潔にまとめた
 ものである。
 大田三樂齋の
 著作には、
 『大田三樂齋
 集』、『大田
 三樂齋書目録』
 などがある。
 この巻は、
 大田三樂齋の
 生涯を、
 簡潔にまとめた
 ものである。
 大田三樂齋の
 著作には、
 『大田三樂齋
 集』、『大田
 三樂齋書目録』
 などがある。
 この巻は、
 大田三樂齋の
 生涯を、
 簡潔にまとめた
 ものである。





木下秀俊
 人老きぬ
 三三ろ
 申
 ち
 ち
 あさ
 むん
 あま
 木下秀俊
 命
 何ん
 おん
 木下秀俊









輯者

緑亭川柳

畫工

口五頁
自一至三十

前北齋卍老人

全

自一至十

一勇齋國芳

全

自一至二十

一猛齋芳虎

全

自一至四十

一玉蘭齋貞秀

全

自一至五十一

一陽齋豊國



畸人百首

綠亭川柳輯
袋入二冊 近刻

瑞應百歌撰

綠亭川柳輯
全部十冊 近刻

嘉永三年庚戌正月發兌

馬喰町三丁目

東都書肆 錦耕堂 山口屋藤兵衛梓

日本橋通重丁目

同 貳丁目

同

東都

芝神明所

同

水石町十軒店

芳町親仁橋筋

大徳町三丁目

横山町壺丁目

芝草場町三丁目

横山町三丁目

馬喰町貳丁目

書林

須原屋茂兵衛

山城屋佐兵衛

小林新兵衛

岡田屋嘉七

和泉屋市兵衛

英水大助

山本平吉

丁子屋平兵衛

出雲寺万次郎

須原屋印八

和泉屋金右衛門

山口屋藤兵衛



